

福岡県宗像市王丸地区の昔の子どもの生活

小方, 正人
宗像市第二赤間保育園

<https://doi.org/10.15017/9027>

出版情報 : 生活体験学習研究. 2, pp.103-108, 2002-07-31. 日本生活体験学習学会
バージョン :
権利関係 :

〈聞き書き〉

福岡県宗像市王丸地区の昔の子どもの生活

小方正人

Children's Life in Old Days in Ōmaru District of Munakata City, Fukuoka Prefecture

Ogata Masato

要旨 本稿は、1985年（昭和60年10月）に発行された「宗像生活史聞き書き研究会」の機関誌「宗像むかしの生活研究」（創刊号）から著者の孫にあたる本学会会員小方信二氏の許可を得て転載したものである。「宗像生活史聞き書き研究会」は、当時赤間保育園の園長をされていた小方正人氏が中心になり、開発と都市化の大きなうねりのなかで消えつつある福岡県宗像地区の昔の生活や習慣や風俗を、記憶のある人々が元気であるうちに書き留めておこう、ということで作られた会である。小方正人氏は、昔の生活は現在のそれに比べるとはるかに貧しく、不便である、しかしそこには豊かな時代の子ども達が遅しく、心豊かに育てたための大切な手がかりがあると考えておられた。

〈登校風景〉

農家はどこでも朝が早い。まだ薄暗いうちに家人と一緒に起こされます。まだ眠い目をこすりこすり寢床を上げて、茶のこ（朝食）を大いそぎで済ませます。菜っ葉の漬物か、千本漬（たくあん漬）、梅干、自家製の醤油のもろみお菜で、麦飯か粟飯にお茶をぶっかけて流し込むのです。それからアルミの弁当箱にその飯とお菜を詰めこんで、一・二冊の教科書とブリキの筆入れを風呂敷にキリキリ巻きに包み込んで、斜めに背負うか、腰に巻きつけて家から飛び出すと、近所の友達が二・三人誘いに来ています。

途中で、麦畑に走りこんで墨穂を抜いて笛を作ったり、きれいな淡紅色の毛せんを敷いたようなほうそう花（レンゲの花）の田の中で暴れまわったりしながら学校に行きました。

悪戯が激しくて、並通の麦の穂を抜いたり、蓮華草畑に寝ころんだりしますと、上級生の人から叱られた

り、村の人から学校に申し込まれたりしました。女の子は、よく石蹴り遊びなどをしながら登校していました。

〈服装〉

着物と言えば、上から下着まで年中手織りの木綿の緋か縞のもので、男の子は筒袖ですが、その両袖口はしよっちゅう鼻汁をこすりつけるので糊をつけた様にピカピカに光っていました。シャツも手縫いの木綿のものを着ていました。帯は三尺の兵児帯と言うのをしていました。冬になると綿の入った鉄砲袖と言うものを着ていきました。帯には必ずヒモを付けた肥後守（折り込み刀）を下げていました。履物は殆んど年中、藁で作ったつんこ草履（足なか）でした。下駄はお盆か正月か又は親類に改まって行くときと雨降りの日だけでした。女の子は三つ組のお下げか、稚子輪に結ってました。男の子は丸坊主の短い髪の毛です。

〈連絡先〉

小方正人・小方信二（宗像市第二赤間保育園園長）
〒811-4165 宗像市広陵台1-8-4（電話 0940-34-1202）

<学校生活>

1. 掃除

学校へ着くと、先づ掃除です。早く来た者から机と椅子を教室の後ろの方へ寄せて、はわいたりチリ打ちを掛けたり、床はバケツの水を浸した雑布を絞って拭いていくのです。勿論受持ちの先生も指図をしながら一緒に働いておられました。また、一組は外庭の掃除で、大きな手製の竹の小枝を集めて作ったホウキや松葉かきで、受持ちの区域を掃き清めます。その間に衛生当番と言って高等科二年の人が腕に桜の腕章を巻いて、黒表紙の手帳を持って回り成績等を書き入れています。やがて全校生徒がきれいに並んで朝会があります。週番の先生や校長先生のお話し等があり、その後先の衛生当番の生徒が手帳に記した成績等を朝会台の上で上げて発表します。ですから掃除の時などでも怠けたり、悪戯などをしたりはされませんでした。

2. 授業

それから解散があってしばらくすると授業合図の鐘の音で教室へ入ります。たしか入場の鐘は三つで、授業終わりの号鐘は二点だったと思います。不時呼集は乱打でした。三点鐘を「入り鐘」、二点鐘を「出鐘」と呼んでいました。

授業は三・四年生位までは午前中で、五年生位から午後二時間あり、高等科になると午後三時間位になることが多かったようです。土曜日はたいてい全部午前中でした。勉強科目は、修身・読み方・算術・書き方・体操・図画・手工・唱歌位で、高等科になると男子は農業、女子は裁縫がありました。農業等と裁縫科には専任の先生がおられて、農業には実習の畑や田があり、ここにできた四季折々の野菜等を町に売りに行ったりしました。

授業時間は四十五分で、休み時間は十五分、お昼は弁当食べるの時間が一時間ありました。この時間は良く遊びました。冬は蹴り馬や千本漬（おしくらまんじゅう）をしたり砂場で角力をとって温まりました。冬季には教室に弁当温めと言って火鉢の上に四角の棚を乗せ、それにサクがあり弁当を並べておくのです。また、正月頃にはふところに焼餅を新聞紙に包んだのを入れて冷えないようにして、中食かわりに食べる者も多かったものです。

なお、当時、私達が使っていた学用品と言えば、一・二年頃は石板に石筆、上学年になるにつれて木筆（鉛筆）一本か二本、豆の様な消しゴム、小刀一本、色鉛筆。クレヨンなどありませんでした。筆、墨、一尺の鯨尺と曲尺とついた竹の物指し、まあこれくらいの物でした。それを兄姉ゆずりのブリキの絵がはげたり、デコボコになったりした筆入れに入れていました。

習字の時、いつも硯は机の中に入れているのを出して机の右端に置いてありますと、水当番が硯に水を入れて回ってくれます。お習字帳は練習用のものは新聞紙八つ切りくらいのものを重ねて竹のヘラで綴じて用意して、紙の表も裏も真っ黒になるまで書くのです。常は机の横に下げたおきました。清書用の紙は先生が配って下さったように覚えています。筆を取る前に姿勢を正し、先生が書かれる通りに手を挙げて練習をしました。先生が黒板に水筆で大きく書かれた文字の蹟や、時々巡って来ては頭越しにじっと運ぶ筆を見ては、腕を差しのべて手を取って運筆の指導をして下さった、あの掌の温かみが昨日のように思い出されます。しかし、いたずらやわき見をしたり墨のつけ合いなどをしたりすると鞭で頭をたたかれたり、廊下に立たされたりしました。その鞭は自分達がさがして持ってきたものです。けれども、決して家では先生から叱られたり罰を受けたりしたことはありませんでした。親達は先生を神様の次くらいに思っていたので、言えばかえって反対に大目玉を喰うことを知っていたからです。

実際、親達は、子供は学校にあずけておけば何から何まで教えてもらい、一人前の立派な人間に仕上げてもらえるものと信じこんでいたものです。そんなにこわい先生ですが、先生の宿直の晩や日曜日には、先生のお宅に遊びに行ったり、泊まったりしました。ある時、学校に泊まって寝具が足りないので、裁縫室に夏の蚊帳を引っ張り出して来て先生と雑魚寝をしたことがありました。高等科になりますとみんなで作った夏休み帳などを原紙に切りとったり板づくりをしたこともありました。また、よく裏の松林の中でお話を聞いたり、学習したりしました。

卒業すると何を置いても母校の小学校へかけつけて先生達と面会するのが楽しみでした。担当の先生が転任されていても、他の諸先生方が大勢いらっしやるのでやはり母校に一番に行きました。

<下校風景>

さて、最後の授業が終ると、朝のようにお掃除をして終ると、二・三人の友達と校門を出ます。途中では原町のお菓子屋の店先で栗まんじゅう焼を見たり、鍛冶屋でしばらく遊んだり、紺屋の藍染めの絞り方を見物したり、蠟燭屋で蠟燭作りを見入ったり、精米機械を眺めたり、魚屋の店先の魚を数えてみたり、自転車の小父さんからどなられたりして、王丸までの道中は随分のんびりしたものでした。春先だったら、そこらの道端に立っているキジキジを折って食べたり、麦笛を吹いたりしました。雲雀が青く澄んだ空高くあがる声と麦笛の音とか田んぼの彼方から聞こえて来るようです。

長かった春の陽が許斐山の肩に傾むく頃になると、ふと、カド（庭）に干してある梅を取り入れることを思い出して大急ぎで家に向って帰って行きます。

<手伝い>

帰り着くと手伝いです。申し訳に持って行った教科書や雑記帳、弁当箱等の包みを畳の上に投げ出して、太陽が山かげに沈まない内に、糶を集めて箆をたたんでおくのと、それが済むと牛小屋に草をほうりこんで、それから暗くならないうちに、ランプの掃除を忘れないでしておかなければなりません。ランプのホヤは念入りに息を吐きかけ、竿のところは竹ばしの古いものの先に、習字の紙などを巻きつけて念入りに、キュツキュツと上手に磨きます。それから燈芯を上手に切り揃えて形を整えるのですが、これが下手に切ると、火をつけたときに真っ黒なススがせっかく曇一つ無いように念を入れ磨きあげられたホヤを真っ黒くしてしまいます。ですから念を入れて切り揃えるのですが、これには自然と覚えたコツがあり、子供ながら長い間に体験を通して習得したものです。次に下の台になっている石油入れに石油缶から石油を一杯に入れて終わりです。この他にも忘れてはならないものに、風呂わかしがあります。手押しポンプや両手にバケツを下げたりして水を風呂にくみ込みます。それから釜の下にマキをくべて、うまい具合にマキを燃やし始めるのですが、雨降りの日などはマキが濡れていたり、クドの中に雨水がたまっていたりして困りました。

とにかく、風呂をわかすの一事でも苦労して大変な

ことでした。風呂がわいた頃は、外は薄暗くなっている家の人達がそれぞれに田畑から疲れて帰って来ます。大抵、夕食前に家中の雨戸を閉めるのも子どもの仕事でした。家族みんなと夕食を食べ終わると、風呂に入るのがいやになりますが、おごられまわってしぶしぶと、鳥の水浴びよろしく早々に湯から上がると、もう睡くなります。家の者も長く起きて居ると油代が高くなると言って、特別に夜業のない時は一家中早々に床に入ります。その頃の学校では宿題などめったになかったし、もちろん予習や復習は、優等生が明るい間に手早くやって片付けるくらいで普通では早く床に入って眠ります。いつまでも、モゾモゾしていると、「明日は遅刻するぞ」と叱られました。

隣近所の友達は必ず朝夕、さそい合わせて登下校しますが、そんなとき意地の悪い、根深い喧嘩やいじめはしなかったようです。大抵の場合は年長の子達が中に入って止めたり、叱ったり注意しますので、それでさっぱり片づいてしまい、明朝はまた何事もなかったように仲良くさそい合わせて行動を共にしました。たまには、母親とか祖父母等が出て来ることもありました。家と家との間では何のしこりも残らない、日常の生活でした。

<遊び>

さて、一年中の遊びについてですが、そのいろいろの遊び方やきまり、遊び道具の作り方などはたいてい年上（上級生）の子から習ったり、自分達で工夫したりしました。子どもの社会では長幼の序がキチンと決まっていました。

春は、学校の帰り道などギシギシの茎をかじったり、ズバナの若い所を食べたりしました。つくしもたくさんとりました。山いちごや草いちごでも腹一杯に取って食べました。四月三日のお節句頃には、小川の美しい流れには新しいセリが生えており、隣の田んぼには大小さまさまなタニシがころがっていて、それらを美しい花籠に入れて帰りました。つわやふきや筍などは、そこらの藪にちょっと行くとありました。四月八日のお釈迦様の誕生日には、ビンなどを持ってお寺に参り、甘茶をたくさんもらって帰りました。

五月の節句前になりますと、ガメノ葉（山帰来）を取りに行ったり、千巻箆を許斐山に切りに行ったりも

しました。夜になると母親や祖母達が千巻だんごやガメの葉まんじゅうを作りました。こいのぼり等を上げる家はありませんでした。桜の花の頃は許斐山に下駄をはいて子どもを背負って登ったりしても平気な顔をしていました。また、雨降りの日にはお宮に行って、角力をとったり芝居のまねごとをしたり、鬼ごっこをしたりして無中になって遊びました。床下の乾いた砂にはベベンコ（蟻地獄）が居るのを探したりしました。月に一回日曜日に組合毎に別れてお掃除に行き、階段なども掃いていました。それで、ごほうびに洋紙を村から何枚かもらいました。

<四季折々>

春はうぐいすがあっちこっちで鳴き比べをしているようで、梅・桜と、いろいろな花が咲きそろい、そして散っていきます。農家の広い庭の片すみには必ず四季の草花が咲いていて陽も長く楽しい季節でした。

初夏に入りますと、あっちこっちの木々が松ゼミがいそがしく一斉に鳴き立てて農家は田んぼの仕事が忙しくなります。しかし、子ども達にとっては身軽るに飛び廻れる良い季節です。さなぶり（早苗振）や苗代籠りで部落中の休日には水鉄砲を作ったり、水車や竹笛を作ったりして遊びました。またこの頃になりますと、海の実や山桃・スモモなどの実が熟しますし、山イチゴや草イチゴが熟れました。また、焼米やコウセンやはったい粉等もできておやつには困りませんでした。

夏休み近くになりますと、目白とりも大きな遊び仕事の一つでした。小刀とキリ一本で竹を割り、竹ヒゴを作り、錐で穴をほがして、小鳥籠を作り上げます。その間に山に行って、“とりもち”の木を探してその皮をはぎ、川に浸しておいて数日たって引き上げ、川辺の石の上で根気よく叩きつぶし、流れ水にさらして皮クズをよく洗い流しますと、ねばい、引きの強いとりもちができあがります。指にカラシ油（菜種油）をつけてそれを竹の小枝に上手にぬりつけ、その枝の下に囀の鳴き上手な目白を籠に入れたのをつるして、お宮の前の小川のふちなどに立てて樹影にかくれて持っていますと、高い樹上あたりから他の目白が飛んで来てしばらく鳴き比べをしています。そのうち急に降りて来て、とりもちの枝に止まりぶらりと下がったとこ

ろを素早くとらえてしまうのです。それを新しく作った籠の中に入れて、餌づけをして飼慣らします。これは夏休みの中で最も楽しい遊びでした。それから、麦藁で作った螢籠を下げて、竹笹を持って川の方にホタル取りに行きました。螢は夜道を歩くと胸に打ち当たる程にいたものです。

夏の遊びの楽しいものには川魚取りがあります。バケツは小さい子に持たせて、さでやどじょう取りしょうけや長しょうけをそれぞれに持って、近所の小川に出かけます。川の中にはどじょうやどんぼやはぜや小フナなどいろいろの小魚が居ます。時には素手を“うど”（川岸の洞窟の穴）に入れますと中から、どんぼ・なまず・つがに、時にはうなぎなどがいました。あまり獲物を追いかけて、思わず遠い隣部落の方へ行ってしまうこともありました。また、川や溜池での水泳も盛んにしました。溜池で泳ぐことは学校も家庭からも強く禁止されていましたが、家人がみんな昼寝をしている間にこっそり手拭きを持ってみんなと泳ぎに行き、昼過ぎ三時頃になってくたくたになって重い足を引ずるようにして、こっそり帰って来たりしたものでした。それから蟬取りも面白いものでした。長い竹の先を三角形に開いて、それに新しい蜘蛛の巣の糸をたくさんに巻きつけて、それで樹蔭に止まって鳴いている蟬を取って巡ったものです。また、蜘蛛合戦をして遊んだりもしました。軒の上の方などに網を張っている強そうな“じうら”（女郎蜘蛛）を捕えて一本の竹棒の両方から、はわせて遂に喧嘩をさせて勝負を競うのです。この遊びは今でもどこかの地方で、大人の遊戯として大々的に行われているそうです。

七月に入り、古くから部落に伝わる翁面拝みがあり、祇園祭には御神興の後から三台の短冊山笠が続きます。これは三つの組合の子ども達のもので、一ヶ月前からコヨリ作りを始め、お小使いを出し合って色紙を買って短冊形に切り、コヨリをつけて、山から枝振りの良い木を切って来て、それに一杯短冊を飾りつけて、車力（大八車）にゆわえつけたものです。これを作りあげるのにみんな協力して大いそがしでした。しかし、これもまた楽しい夏祭りの行事の一つでした。

苗代籠りや“さなぶり”、植え上がり籠りなどが終わりますと、お盆です。お盆には初盆の家で行う青年会の人々の博多二輪加を見て廻ったり、盆踊りに加わった

りして盆会を終る頃お大師堂で千燈明の行事があり、昼のように明るい境内を遊んでいるうち、明るい月も傾く頃名残り惜しげに家に帰って寝ました。この頃になりますと、帰る途中の草むらでくつわ虫が気ぜわしく鳴き立てていたり、スイッチョがやさしく声を出して鳴き始めていて、夜の空も澄み透った色に見えたものです。

爽やかな秋風と共にツクツクボウシの声も段々遠くなり、トンボの数も日毎に少なくなっていくと、二百十日です。その頃には各部落で風止めのお籠りや豊熟祭等があるため、区長さんから当日は早く帰らせてもらうようお願いがあり、その部落の生徒は学校は早引けとなり、お籠りやお祭りに間に合うように帰りました。そう言えば、田植え休みや稲刈り休みがおおかた三日から一週間ありました。明月様の夜は、枝豆やいもや柿を各家々にもらって回りました。貴船様の小高い椎の森では、子ども角力の行事があったりしました。

宗像神社の秋季大祭は十月一日からで通常“田島様のお祭り”とって年に一度の郡を挙げての大祭で、二・三枚の銅銭を握りしめて三里の道を友達と歩いて参りますと、近づくにつれて高もん（サーカス）の音楽が風に乗って聞こえて来る頃は思わず小走りになっていました。氷水一杯飲んで、飴玉をしゃぶりながらやっとなゾキを見て帰りました。

秋も半ばから終わり頃になると、各地の宮角力が始まり、近くの部落のお宮まで見に行ったこともありました。

よく晴れた日曜日などは、兵隊ごと（兵隊ごっこ）をやりました。竹のサーベルや機関銃や鉄砲などを持って、手製の肩章などをつけていました。二手に別れて、裏の小山や墓の近くの小松山に陣を取ります。勿論両軍の指揮官は最上級生です。初めてしばらくは口鉄砲で打ち合っていますが、やがて指揮官の号令一突撃に移ります。ところが兵隊どもがさっぱり出て来て前進せず、どうしたのかと思うとしばらくして、口のまわりを紫色に染めて、ガサゴソと出て来るということもありました。ミソッチョの木影にかくれていて、その実を食べることに夢中になっていたのです。今、思い出しますと実にのどかな少年の日でした。稲刈りが終わった頃、本来の軍隊の機動演習があり、馬に乗って銃をかった騎兵や野砲隊、機関砲隊や銃をか

ついだ歩兵の長い隊列が、原町の住環を通ったり、実際に藁こずみの並んだ田んぼで演習が始まることもありました。また、時としては各部落に兵隊さん達が一泊することもありました。そんなとき私達は学校で勉強に全く身が入らないものでした。

この稲刈りの終わった田んぼこそ、私達子どもの自由の天地でした。かけっこ、角力、ねん打ち、いろいろなことをして遊び呆けていました。塔しゃく（藁こずみ）は最も良い鬼ごと（鬼ごっこ）のかくれ場でした。これに穴をあけて寝ぐらにすることもありました。こうして殆ど終日を田んぼで遊び暮らしたものです。また、部落中の道路も同じように思う存分走り廻ったよい運動場でした。近まる学校の運動会での部落対抗の徒歩競争の練習を日の暮れるのも忘れてやったものでした。

また秋は野山に食べ物がいっぱいありましたので、ここも終日よい遊び場でした。栗、あけび、うべ、椎の実やまつたけなどです。畑や屋敷の角のような大木の枝先には黒く熟したおいしい椪の実がたわわになっていました。それを、登下校の途中、根元に雑のうや風呂敷包を投げ出して、いち早く枝を伝って樹に登り、心ゆくまでその甘い実を食べたものでした。

楽しかった運動会も終り、北風が吹いて時折、ミゾレなどが降る頃になりますと、善徳寺のお十夜法要が二晩続いて始まります。この晩は、毛布やマントを持って本堂に集まった。多くの参詣の人々の間に座って、初仏に捧げる諷誦の言葉もわけのわからぬままに長い間聞いていました。そして、そろそろ足が痛くなったり、眠くなってくる頃やっとな終り、冷たい大根煮に冷えきった握り飯が配られます。それを食べ終わると、次の有難いお説教は聞かずに寒空の下を家に帰るのが毎年のことでした。でもそれも楽しみの一つでした。

十二月に入ると、原町の大安売り（誓文払い）が何日か始まります。このとき呉服屋や雑貨店の大安売りの赤い旗をくぐって、下駄や足袋を買ってもらったものです。この間中、何か心も浮き浮きしながら学校から帰りましたが、途中、原町から王丸に出る曲り角あたりの風の寒かったことは、今になっても忘れられない程です。水鼻を袖口でこすりこすり急いで帰りました。

原町の三日恵比寿様のお座が終り、やがて本格的な

寒に入ると朝早く造り酒屋の男衆が、井戸水を滑車でくみ上げては半切りに入った米にぎぶぎぶと流し掛け、大きな透る声を張り上げて歌いながら素足で威勢よく米をとぐ姿を見掛けたものです。こんな寒い日や雪の降る日はたいいていケットウ（毛布）を頭からかぶり、首のところが手拭いで結んで行きました。まるでだるまさんの行列のようです。ふところには学校に着いた時のき替えの足袋を温めて持って行ってました。一・二年生の小さい子は、ケットの裾が道につかえて、その先に小さな雪の玉がいくつもできていることもありました。

お正月になりますと、男の子は向う道や田んぼでタコをあげたり、お寺や薬師様のお堂などでおこし（メンコ）やパチをしたものです。そしてそれらはハガキで作った手製のパチでした。加藤清正のように鉄砲袖の片方を頭にかぶり、一方の袖を持って風を起こしながら勝負に熱中したものです。また、お宮の境内では独楽廻しをしました。しゃぎあし（竹馬）を作って、その高さを競い合うこともしました。年長者になると屋根から乗って歩く人もありました。女の子は、おはじきやおこしやチリ紙を出し合って重ね、それに糸のついた針を打ち掛けて、その針について上がった紙の数だけ自分のものとなるいわゆる針打ちや薬の入替屋からもらった紙風船などを上げて遊ぶ遊びなどをしていました。

それから、山の中に小鳥ワナを掛けに行ったこともありました。あっちこっちの山の中に一人で、二張も三張も仕掛けておいて学校に行く前とか、帰ってきてそのワナを見廻りに行くのが楽しみでした。掛かった小鳥は、小鳥飯にしたり焼いて食べましたが、小鳥は案外うまいものでした。骨までガリガリ食べてしまったものです。

雪の積んだ日は、家々で雪だるまを作り、また学校では運動場で雪合戦をしました。その間に大穂の馬頭観音様のお祭礼があり、遠近の馬がたくさん着飾ってお参りをしにきていました。その時は露店も何軒か出ていましたので、学校帰りには小使い銭を二・三銭持って子どもたちも参ったものです。

やがて三月になり、卒業式が来ます。通信簿をもらって帰りますと、各組別に分れて免状祝いと言うものをします。この時は全く子どもが自主的に行います。献

立・料理から一切を自分たちで仕切るのです。当番の家でそれが行われ、お金は上級生が五・六銭、小さい子が二・三銭位出し合いました。米は四合切です。その家に泊まりはしませんでした。明くる日も会食をしました。セリ摘み、ツクシとり、魚買い等手分けをしてしていましたが、それは、ほんとうに楽しい行事でした。たとえ通信簿の成績は悪くとも、みんなそんなことは忘れてしまっていました。なお、当時の成績は、甲・乙・丙・丁・戊でしたが、戊をもらう者は殆んどおりませんでした。学科の下に“操行”と言う平常の行いを評価したものを記入する欄がありました。さて、此の免状祝の行事が終ると、子ども達にとって本当の楽しい春が来たことになります。

○お話を下さった方

中村佐七郎さん（明治34年1月1日生）

村山芳太郎さん（明治34年8月6日生）

中村助次郎さん（明治41年11月22日生）

小方仲吉さん（明治42年11月18日生）

小西正明さん（大正元年8月20日生）

村山正美さん（大正3年6月18日生）

小方悌次郎さん（大正5年3月20日生）

花田エンさん（明治32年8月9日生）

村山キヌエさん（明治39年7月20日生）

小方ツネ子さん（明治42年6月30日生）

村山菊代さん（大正4年8月11日生）

村山スミ子さん（大正6年6月15日生）

小方タケ子さん（大正7年10月21日生）

○聞き書きした日 昭和59年秋～60年春

